学校だより

太陽の子 ２月号

令和７年２月７日
バンドン日本人学校

2/1 日本文化体験 Vol.2

10 月に続いて２回目となる「日本文化体験」を開催しました。今回のテーマは「日本の正月の遊びを体験しよう、伝えよう」ということで、児童・生徒がグループに分かれ、「すごろく」「コマ回し」「福笑い」「書道・水墨画」の４種の体験活動を準備し、運営しました。また、数年ぶりの再開となる地元の学校との交流として、**SURUUR 小学校**（JL.Hegarmanah）の５･６年生児童 20 名と教員３名をお招きしました。BJS 園児･児童･生徒･保護者･職員と体験希望者と保護者など、総勢 100 名を超える盛会となりました。

当日は、児童自作の「すごろく」を共に楽しみ、初めて挑戦する「福笑い」に大きな笑い声が響きました。「コマ回し」では紐の結び方やコマの回し方を説明する際に、簡単なインドネシア語とジェスチャーとで、何とか分かってもらおうとする姿が見られました。中学生が担当した「書道・水墨画」では初めて筆で半紙に好きな漢字を書くことができ、思わず笑顔と拍手が溢れました。

続いて、インドネシアと日本の子ども達が一緒になって「凧づくり」に挑み、全員が自作の「凧」を手に校庭を走り回りました。自作の凧に両国の国旗を描く子どももいました。

BJS では各種行事や集会活動などを単に楽しい想い出となるイベントとしてだけではなく、「何のためにするのか」という目的をキーワード化し、子どもと大人とで共有しています。今回も、**「感じる」「責任」**そして**「交流」**という明確な目的を共有しました。

BJS の子どもたちは、当日までの準備や運営に一人一人が**『責任』**をしっかりと果たそうとしていました。また、正月遊びを通して、あらためて日本の伝統文化に関する理解を深めるとともに、相手意識をもって伝える難しさ・伝わった喜びを**『感じる』**ことができ、その上で、**『交流』**を深めることができたと振り返っています。今後もこのような形での交流の場を継続していきたいと考えています。

第45回海外子女文芸作品コンクール

（財団法人）海外子女教育財団主催で世界中の多くの子どもたちの作品が出品される「海外子女文芸作品コンクール」。今年度で第45回を迎える歴史と伝統あるコンクールです。「詩」・「短歌」・「俳句」・「作文」の４部門があり、今年度は、総数29,820点もの作品が応募されています。BJSでは毎年このコンクールに積極的に参加していますが、今年度、３名の児童･生徒の４作品が受賞しました。

俳句の部
文部科学大臣賞
犠牲祭
ひもだけ残る
夏の朝
中学部三年・遠藤乃愛さん

俳句の部
日販 IBS 賞（協賛賞）
バティックで
新入生を
おいわいだ
小学部四年・吉田隆平さん

俳句の部
優秀賞
のぼりぼう
やっとはんぶん
なつのそら
小学部一年・坂本廻さん

児童生徒数22名の小規模校から３名もの児童・生徒が受賞したことは、とても誇らしいことです。「俳句」部門には、全18,517作品あり、「文部科学大臣賞」はその筆頭となる１点です。「協賛賞」、「優秀賞」もそれぞれ上位10点、56点の一つという素晴らしい受賞です。

全校児童･生徒が集い、表彰披露を行う中で、仲間の受賞をともに喜びました。賞の栄誉もさることながら、廻さん、隆平さん、乃愛さんの豊かな感性と表現力の素晴らしさを称えました。

【選者の方の「評」から引用】
「犠牲祭」はイスラム教の祭事です。羊や山羊などを絞めて肉にして、貧しい人たちにも分け与えます。翌朝には、もう家畜はいないのだけれど、つないでいた「ひも」だけが残されています。情景が、とてもリアルに描かれています。作者の感情については触れず、「ひも」という客観的なモノだけを詠んでいるのは、俳句における「写生」という方法によるもの。犠牲祭の最中ではなく、終わったあとの情景を切り取ったことで、余韻が生まれています。

まさに、バンドンで生活する生徒だからこその一句です。そして、17文字に凝縮する表現力に、子ども達の限りない可能性を強く感じます。

「作文」の部においても、隆平さんは「協賛賞」を受賞しました。全2,387点のうちの上位10点の一つです。バンドンでサッカーを通じて成長している姿に逞しさを感じます。

サッカーをはじめて

バンドン日本人学校　四年　吉田隆平

「日本！日本！」

ぼくは声をからして、おうえんしていた。

インドネシアに来て半年がたったころ、ぼくの住むバンドンでU17サッカー日本代表ワールドカップのグループリーグが開さいされた。友だちのインドネシア人のお母さんは、「バンドンでワールドカップが行われるなんてバンドンのヒストリーよ。」とこうふんしていた。

ぼくは、日本とポーランドの試合を観戦した。そこで見たのは、せん手が最後まであきらめず一生懸命がんばる姿、チームメートに声をかける姿、ゴールがきまってみんなでよろこぶ姿。どれもかっこよかった。しかも、ぼくの少し年上の高校生が、日本にくらす家族とはなれて海外で試合をするなんて、すごいと思った。ぼくもサッカーをしたい、と自分で決だんした。

それから休み時間、昼休みにサッカーの練習を始めた。しばらくすると、小学部で一人しかいない男の子の友だちとも、一緒にサッカーをするようになった。学校が始まる前に友だちとサッカーがしたくて、今までより早く登校するようになった。ランドセルをロッカーに置いて、朝の準備をしてグランドへ急ぐ。今まで何をするのも時間がかかっていたぼくの行動が速くなったので、先生やお母さんもびっくりしていた。

もっとサッカーが上手になりたいと思って、バンドンの子どもたちが通っているサッカーチームに入りたいとお父さんとお母さんにお願いした。習い事を自分からしたいと言ったのは、初めてだった。

ぼくは、日本人学校に通っていて、先生や友だちといつも日本語で話している。だけど、サッカーチームの練習はすべてインドネシア語なので、ぼくはかたまってしまった。サッカーのコーチがたくさん話しかけてくれるのに、こたえることができなかった。だから、コーチの手の動きから言葉の意味を考えた。例えば「カナン」と言って右を指しているから、「カナン」「カナン」は右かな？意味がちがうこともあるけれど、言葉をよく聞いて相手が何を伝えようとしているのか、考えるようになった。

もう一つは、日本だったら…インドネシアだったら…とくらべて考えて、意見をもつようになった。例えば、日本のサッカーチームの練習は、コーチがこしに手をあててこわい口調で指示をしているのをよく見ていた。時には、みんなの前で怒られていることもあった。だけど、インドネシアのサッカーチームの練習は、人前で怒ることはぜったいにしない。ミスをしても「OK、OK、バグス」とやさしくわらってくれる。おかげでぼくは、のびのびとサッカーをすることができた。インドネシアのいい文化だなと思った。でも、こまったこともある。それは時間にちょっとルーズなところだ。練習時間より前にいるのはぼくと、友だちだけだ。みんな、なんとなく集まってだいたいそろったら、練習が始まる。日本だと「始めます、礼。」とか言いそうなのに、それもおもしろい。

もちろんサッカー以外にも、日本だったら…インドネシアだったら…とくらべてそれぞれのよいところ、こまったところを考えるようになった。

たしかにサッカーは、日本でもできる。チームにも入れる。だけど、ぼくはインドネシアでサッカーチームに入ったからこそ、相手が、伝えようとしていることをよく聞いて考えること、いろいろな考え方やり方があるということを知ることができた。

これは、インドネシアにいないとわからなかったことだ。そして、海外にくらすことは、まわりがかわるだけではなくて自分の「やろう」とする気持ちがあるかないかが大事であるということ。それによって、自分の行動や考え方もかわる、ということがわかった。

日本に帰るまで、ぼくは毎日サッカーの練習を頑張ろうと思う。